

新大洋  
新話  
新語  
新義  
新說  
新法

25

20

15

10

A 754



魯文著  
曉高畫

大洋  
新話  
魚說教

存誠閣  
發兌

大洋新話序

話說龍王在都蒼海  
 名就名繁業修卷不  
 波船棹若街浦島  
 姐旦河豚西毛末原是以

道  
物

序

48-7758

世八三  
聖子の脚色唐舞精  
臺大機関天地人外觀  
了了

桂酒三三結隊歌物



大洋新話叙

著位郎魯文子硯の濱の海を  
より深々大洋の海を渡る地探り  
龍宮世界の秘事を綴り深きを  
海を渡る火の掬もんとを口を閉々  
居る気楼を括りて現を業を

採まぬ救の鱗 雲池の頭を蝮和

為海坊主結 邪心脱身好なり

却る江湖之 空を穿ちる 河伯

の窮乏 不如 疾苦 練中 假名

從教感あり 以て一言を添ふ

中 裴 編幅 傘人漫題

大新話 西洋 蝮入道魚説教摺括

初編 〇第一回 〇第二回

二編 〇第三回 〇第四回

三編 〇第五回 〇第六回

龍宮城の大變革

魚官員の水浴論

鯛博鱗の諫語盡

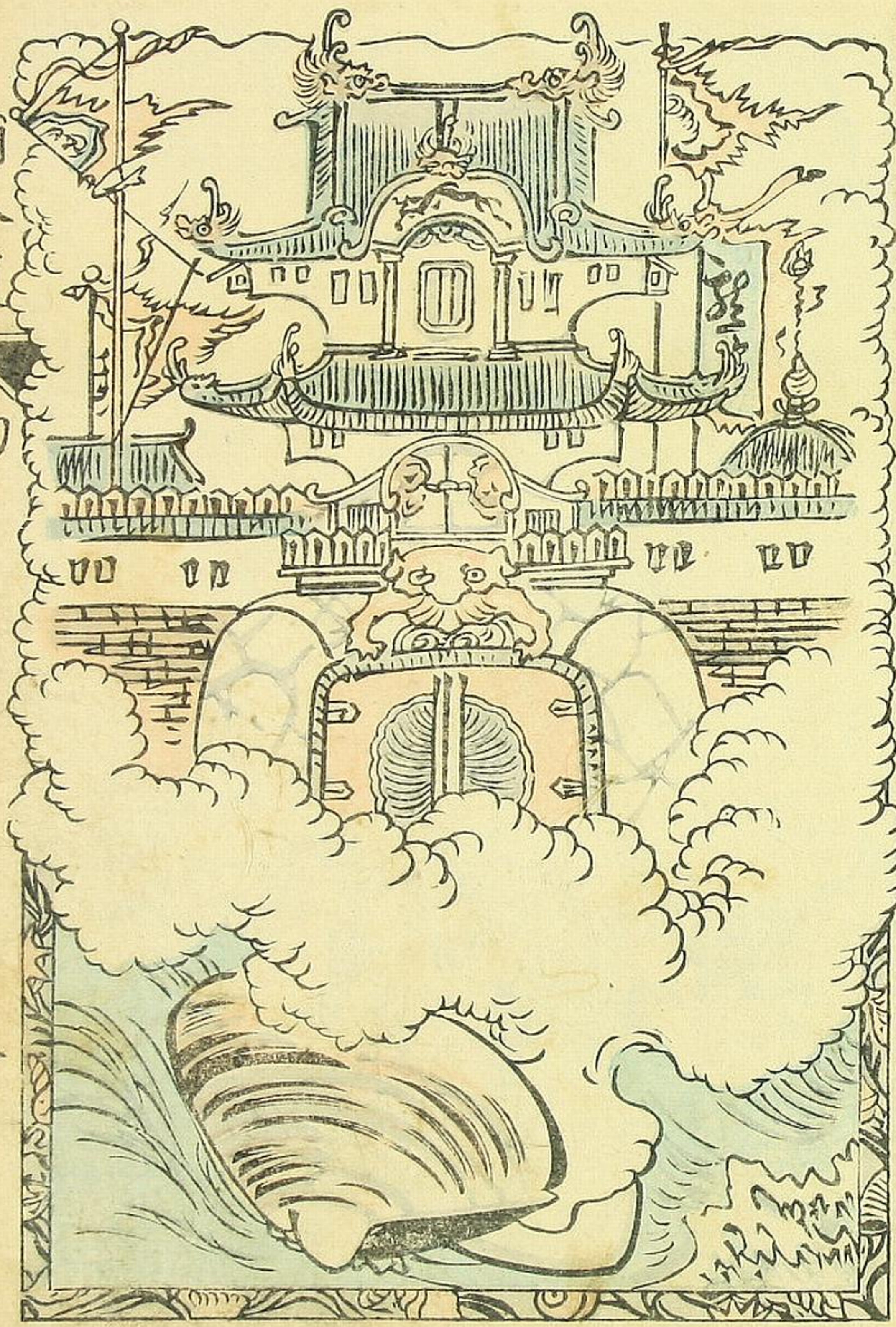
海坊主の蛇宗門

蝮入道の教訓話

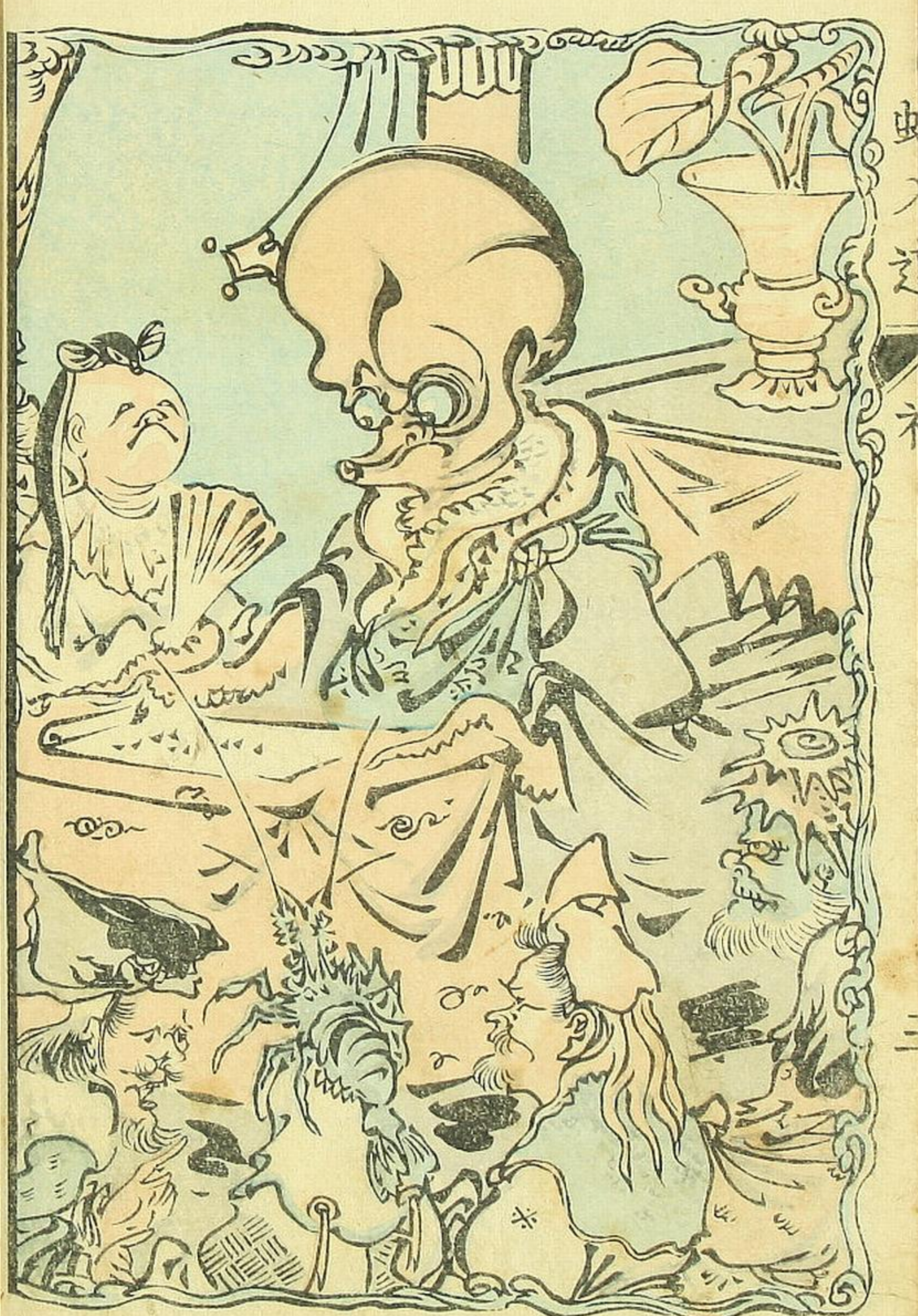
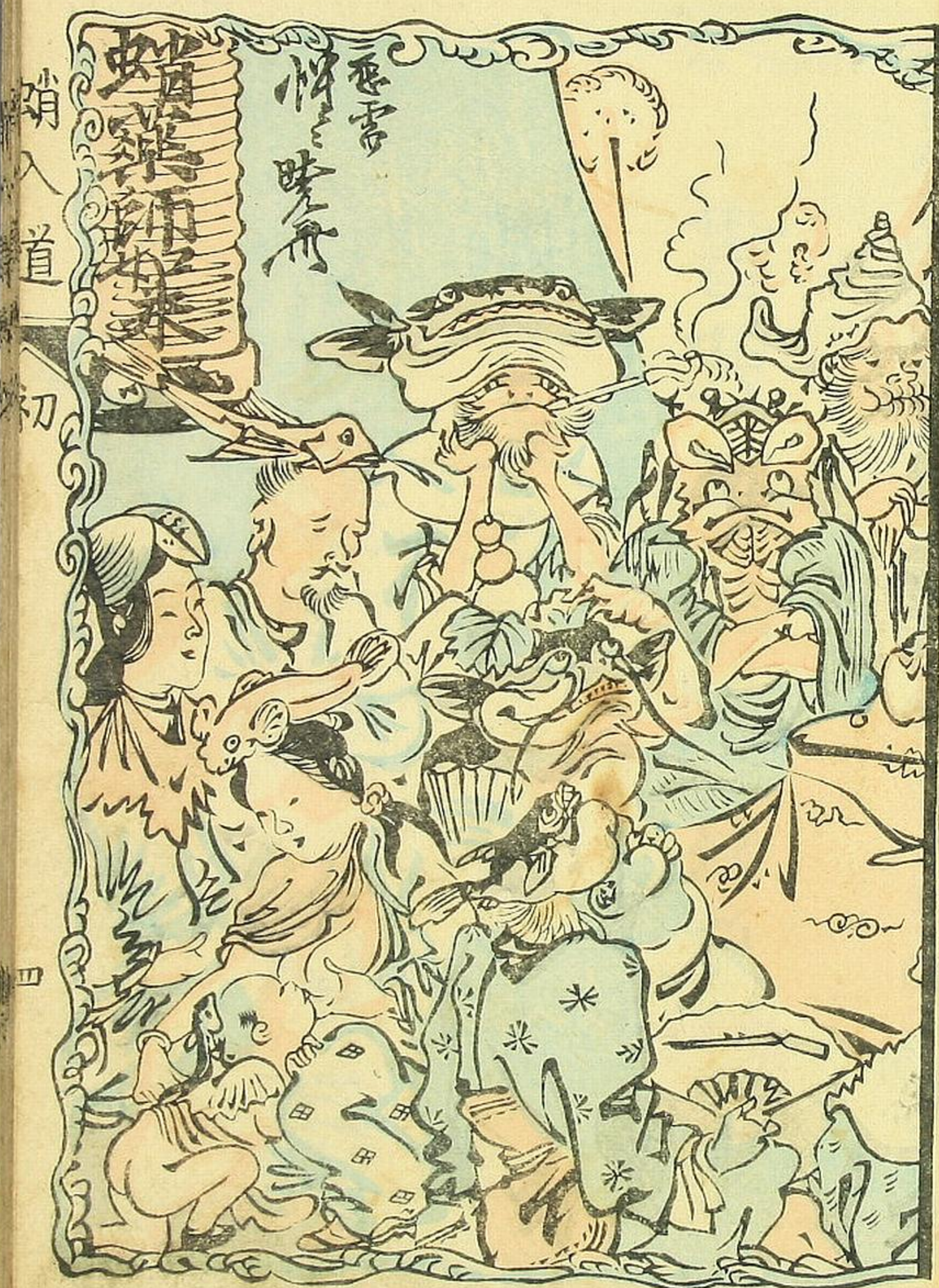
浮漂洲の海化城

凡例

一 此小冊史僕が例の筆頭ハ成る一時の戯作と雖  
 看官の注意ハ因テ又開化の一端を踏ヒ至らん  
 文章の卑俗ヨリ田童野婦ノ解讀易ク人々を要  
 一 無用の書と著述ノ有用と補全クハ僕輩の是と  
 一 其ノ所贅語中自然微意あり稗史の卑きを捨てる  
 具眼ハ更ニ開化の得意ナリ



肖像



# 魚說教笈壹

明治五年申六月

書典存誠閣發兌



蛸入道魚說教初編

東京

假名垣魯文著

## 第一回

大地球東洋の海底に龍宮城あり大古地神  
 四代の天孫彦氷出見尊天釣針と索ねて海  
 水と潜り此龍宮に入り給ひて龍王の御女豊  
 玉姫と娶り給ひ鷓鴣草葍不合尊と産し給

蛸入道

幼

五

ひしより父龍王神孫の外戚たる故を以て  
龍神の尊稱を給り滄溟原を浮漂洲と名づ  
けたり是は古事紀傳に所謂開闢之初洲壤  
浮漂猶游魚之浮上也云々の紀文に因てふ  
り此由來を以て代々の龍王深く神國の風  
儀と慕ひ鱗世界の政令に諸事大皇國を  
摸範として魚則魚法を立來りし以降幾干

の星霜経て人王二十七代の天孫繼體天  
皇の御宇丹後國與謝郡管川水江の漁夫浦  
嶋某此界に漂流せし其時の龍王從來日  
本人を慕ふの餘り息女乙姫の聲として三  
百餘年の其間荒き潮風にあたる緯かく膠  
の玉と愛寵と扶助しける中浦嶋のきさか  
が故郷志し難く強て歸國を乞ひしかば龍

浦嶋傳

六



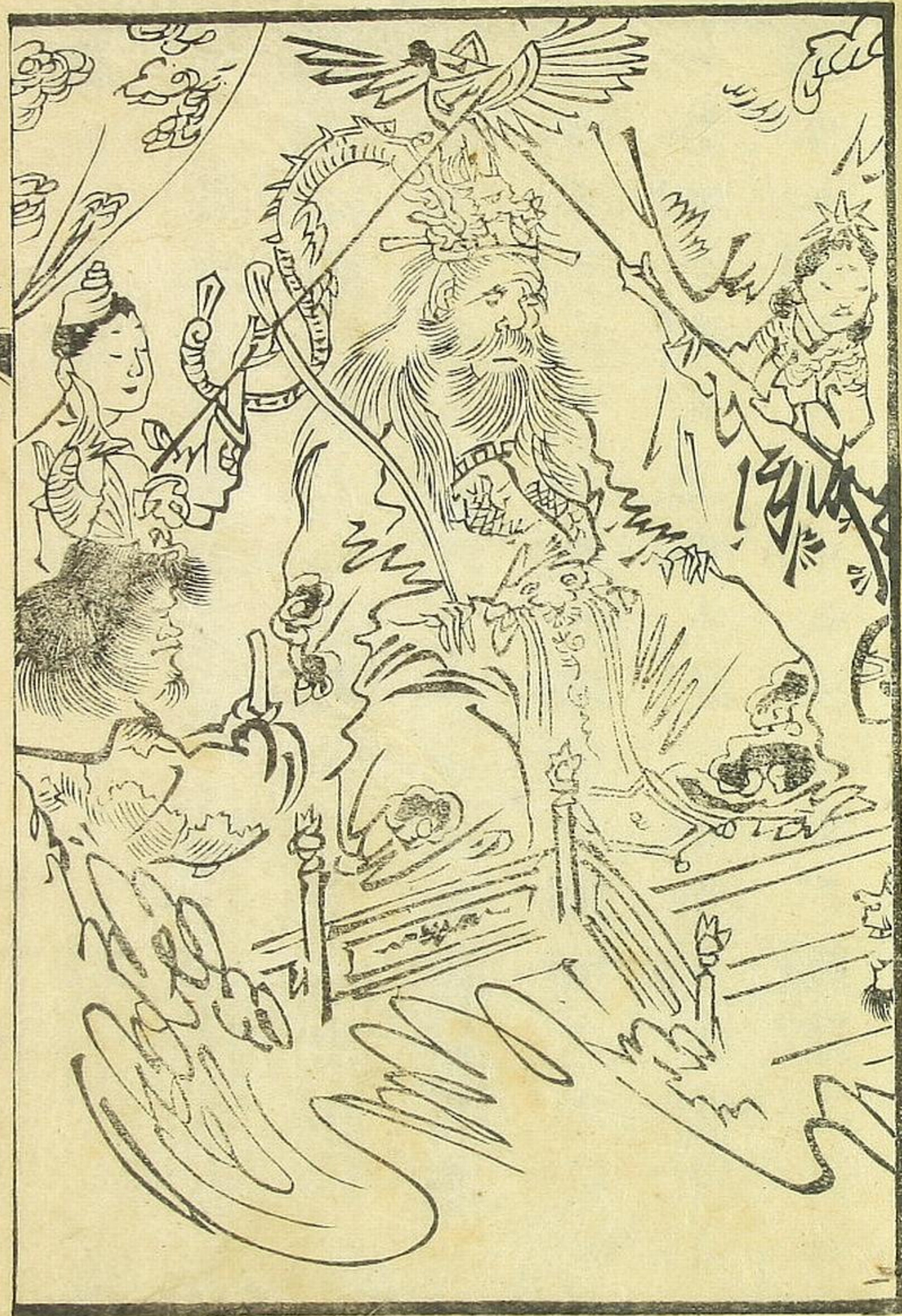
王父子の名残を惜み、饑別として什寶の玉  
 手箱と彼小予へ歸朝せしむ。其後小栗津  
 の冠者田原藤太と請待し、其折る数の宝と  
 授ふ。事是皇國と敬尊の證とこそい知ら  
 ぬ。是は于時兩國橋吾妻橋の中央にて善根  
 功德の人小出會し、放し亀とあし、鰻等龍宮  
 界へ立歸り、水小浮世の新聞と云々と言上

せしかば龍王遠き御耳を傾けて聞し召ま  
 者々の鱗を召し集へ、火烟の如き息継ぎあ  
 へて駭然たる龍顔の汗を拭いて曰ふやう  
 汝等聞らば、方今人間界六大洲中の各國  
 競ひて舊幣を一洗し、文運を隆盛めし、理學  
 を研究し、政令を改革し、發明を一新し、文明  
 開化の域小臨し、君民一和して國を護り、知

覺をひらき知識を博め從事に進歩の最中  
と聞けり抑我浮漂の洲遠く人界を隔て深  
く海底小自立一人倫魚鱉の異なるあまは所  
謂局外中立の方を守りて人界の開化を高  
海を見物せん小豈妨げの有るべからんと  
い思へども待て暫止海底地下の境界の地  
獄領と連りて僅小劔針の山脈と隔つるの

之夫無佛世界の閻魔王國一は預弥國と名  
づけ閻浮提今所謂地球の南金剛山の内  
にあり閻羅王の摠括する處一百三十四界  
あり其臣十八人百万の衆を領し閻羅王は  
か一毗沙國王たり一時常は維陀始生王と  
戦ふ小利あらむ因て誓願して地獄の主と  
あり漸々小版圖をひろげしより今ぞい沙

前八道



降之雷聲

婆を中ちゆうも飛と地ちの領りやう分ぶん密みつありと聞き傳でんへり斯す  
色いろバ外がわ面めんの親せんとく睦ぼくと盡つととと雖なほ内うち心こころ如何いかある  
蚕いと食くの意いと含くまんも量りやううがたし殊ことごと更さら南なんの  
太たい平へい洋やう西せいの大洋たいやうの二に大だい海かいあり其その海かい底ていの  
各かく龍りゆう王わう疾しやくくも人にん界がいの開ひらく化けと聞き知ちり各かく龍りゆう洲しゆう  
小こ固こ陋ろうを改あらため海かい化けの進すすむ時とき小こ至いたり我われ浮う漂ひょう  
洲しゆうの安やす閑かんと海かい中ちゆうの孤こ立たせバ版ばん圖と忽たち地ち隣りん

境さかい小こ併あ合いらまおんると必かならせり朕みづか從より來こ雲うを  
呼よび雨あめを降ふらまると天帝てんてい報ほう恩おんの要よう勢せきと  
心こころ得え自みづか己みづか龍りゆう神しんと僭けん上じやうし或ある時ときの前まえ殿でんの浪なみ間ま  
小こ出でる四季しきの花はな貝かいを合あ或ある時ときの後のち宮みやうの蜃しん氣き  
樓ろう小こ登のぼりて海かい馬ばの曲まが騎きを上う覧らんし魚いさな肉にくの味あじ  
小こ飽ある得え難がたき人にん魚ぎよと食くせんことを思おもひ猶なほ  
小こ驕きやう奢しゃの止とまらざる年とし來きた水みづ虎こ小こ申まをつけ水みづ游あそ

消入道  
物

ぎまる人間にんげんの尻子玉しつこたまを穿抜くわんてつせ佃煮てんじと  
 滋養しやうの食くと一いっ殘忍ざんじん酷烈こくれつの甚たゞ一いっ懶惰らんた放  
 逸いつの勝かちもたれる先非せんひ後悔こうかい限りお一いっささいと  
 上かみを倣なまぶ部下ぶかの鱗うろこ定め一いっ朕みづかみが眼めを盗ぬすと  
 龍眼肉りやうげんの名なを設たてけ食くせんこととを思おもふも有あ  
 るべ一いっ朕みづかみ昨日きのう人間界にんげんより立歸たちかへり一いっ龜鰻かめうなぎ等  
 が言い上あせ一いっ江湖上かうかうの新開しんかいゆと茲こゝ悔悟くわいごの

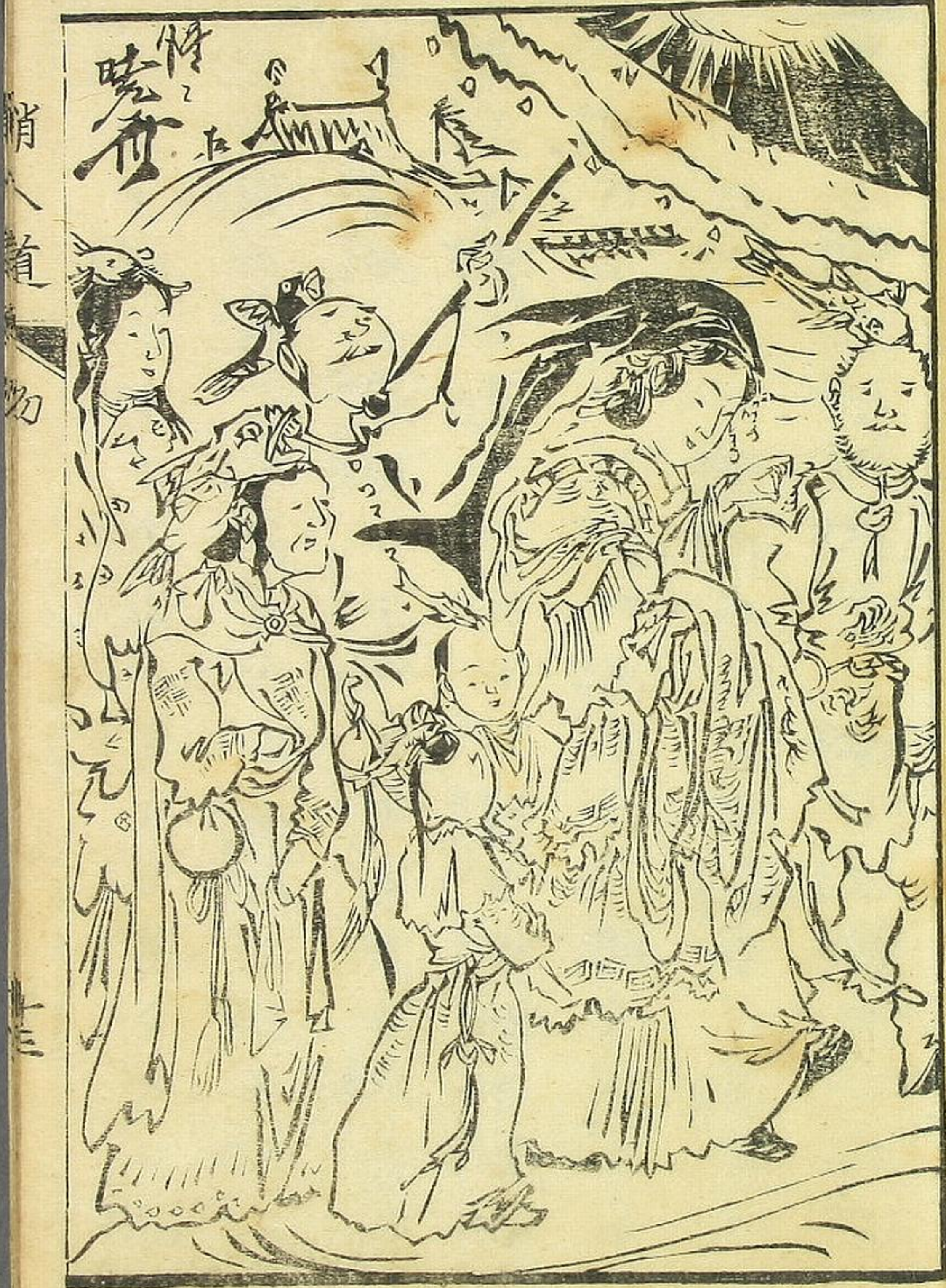
眼めを開ひらき一いっ身の弊害へいがいを御濟ごさい川の流ながれ浄きよめ  
 君民きんみん共治きょうちの政體せいだいゆ倣なまひ龍魚りやうぎょ交游かうゆうの政事せいじゆ  
 歸かへせんを只管しかんゆ急勢きゅうせいとせんとは此上こゝの汝なんぢ  
 等らも水みづゆ浮うと餅もちを求もとり漁船りやうせんの網あみゆ羅らり釣つ  
 夫おとこの針はりゆ腮はらとつる一いっ魚籠いさごの中なかゆびくく  
 せるの三さん面目めんめいゆいあらざるべ一いっ今いまより魚いさな  
 驚おどろの海化うみかゆ進すすと彼北溟かひへいめいの鯢いの如ごとく青雲せいうんの

時を得て大鵬と化し九万里の翅を翻しと  
と小注意せよと大憤發の御氣色龍顔小顯  
とけよバ諸々の鱗等鱗を縮め尾を低くと  
轍の鮒や釜の魚怖も入と退出せり

第二回

却説龍宮城おてハ鱗の諸大臣今般龍王の  
命を奉ト俄小海洲大變革の集議院を設け

つゝ各諱忌なく存意を演同心協力商議を  
変一魚民の知覚を弘むるの布告を出さん  
結構あるも兎角小舊弊染込とたる魚官負  
の水掛論因脩姑息を狩あかき時計の四字  
を待合退連の途中から近來流行人力  
と摸毛魚力の車輟波を蹴立て、新海原海  
門口から下りて入る魚街の引手茶屋尻子



消入道

特  
行



虫入道

十二

玉屋と掛行燈の烏賊の墨をて書たるの水  
 虎の妻の巢穴と見るうち胡瓜の肌を似と  
 面の菊石う笑凹ううつちるる水虎の  
 妻君目疾く見つけコレハ鱸さほ鮓さほか  
 寺揃ひでよろこそか出まづ二階へときを  
 忘りの少女が案内のとんく拍子が茶臼か  
 菓子と響應振り水虎の妻の反齒の口元を

だめと莞尔愛敬つくりろひモシ、鱸さほも鮓  
 さほも昨夜との滄妓へ知約速をさざい出  
 したか昨夕から鯨どんがか迎ひの百度参  
 りコレく鱒魚や洲寄へ行つて鯢さんと海  
 鯨さんのい坐敷と仕舞つてさかそいと次  
 手に見番をか鯉とかろろと板目さき指揮  
 の中か鯉鱒から持込む臺の友食あーと



いたゞく蜻とんぼかな飲のむとと酬たまいと機嫌きげん情なさけへ  
 イ今晚こんばんいと鯨くじら舎やの換か撥は彈だ出でま三さん絃げんの金かね絲いと  
 魚うし子こ坐ま敷しきと浮うかそ浪なみの音ね二ふた挺た鼓このちりか  
 ら夕ゆふツポ、どんどこんの騒さわぎと聞きつけ  
 た一ひとか小こ夫とと押お賣うの替か間まの鯨くじらをの  
 入いり二ふた階かいの梯はし子こバタとく見み附づとくモシ佳い  
 魚うし此こ鯨くじら鯨くじらへ沙さ汰たか一の怨うらみと後のち刺さ先ま一ひと杯はひ

いたゞき鯨くじら鯨くじら鯨くじらと悪わるく古ふる風かぜ小こ洒しや落れの  
 め一ひと肥こ満まんと腹はらの餅もち搗う娘むすめ分ぶんの小こ鯨くじら臍しを抱かか  
 へ咄はなと笑わらひを立た汐しほ小こ迎むかひの新あらた造ぞう海うみ鯨くじら小こ誘さそ  
 引ひとどやく従したがて行ゆ水みづの流ながき小ことまる魚うし心こころ  
 龍りゆう宮みや城じやうの議ぎ事じ院いんの無む實じつの論ろん小こ日ひと暮く一ひと有あ  
 名な樓ろうの掛か額がく小こ画えき一ひと具ぐ化けの蛤かきを呂りよ評へいめ一  
 大だい七しちの鯨くじら濃のう汁じゆを飲のむ酒しゆ宴えんの集しゆ會かい一ひと六ろく定ぢやう

例毎日どんたく斯く宣く日を通るは  
兵急か龍王の逆鱗近きあはるべしと一  
の大臣鯨の心配今日ハ弥大高議魚官負の  
總出仕と達しあより鱗等列を正しと相  
詰けは正座あはる鯨大臣細き眼は  
坐中と見巡し怒濤の浮ぶ鐵甲船の等類口  
とら聞言と語とあづかめいけるやう

扱各も知らるゝ通る先達より龍宮城下  
總て海底改革及び魚民の弊を一洗し文明  
海化あ至らあめんと龍王睿慮を碎かせ給  
ひ魚臣等へ勅命あり我等不肖の鱗かから  
龍城代々の門闕たる故を以て鯨魚あん  
ととあ大任を侵せとて此期ハ因循  
せば其罪一身の蒙るべし老年耄衰の鯨が

身みの龍りゆう爪つめの裂さき骨ほねを削けらる骨ほねを絞しぼらる皮かわ  
肉にくと共ともの耻ちをさうらゝ鯨くじらとありとせうと等ひとし  
く味あじ噌そう汁じゆの鼎たぎの中なかの煮ひらるゝとちと  
むべき命いのちふあら然しかど地球ちきうと共ともの成なり出いたる  
此こ龍宮りゆうぐうの衰おとろ廢へを目前まへふえて其その終はつ過すさん  
ことこそ口くち惜おしけはささば各おの今いまより一ひと  
箇つの龍宮りゆうぐうだよゝひと振ふる起たゝ憤い發はつ勉め強ちやう海うみ底そこ

小報せうほうふ忠義ちゆうぎを尽つさるべしと思おもひ込こんぶる  
總身そうしんの汗あせの脊せ中ちゆうの穴あなよりも溢あふまて空そらの吹ふ  
きあぐる潮うしほと化けしつ八方はつぱうの散ちりて一坐いつざの  
魚官ぎょくわんが尾おし鱗りんを浸ひまむかりあり此時このとき傍かたの以も  
かえたる鯛たうの志こころづか小鱗せうりんを正ただし席せきを進すすめ  
て言いへる中なかう唯ただ今いま鯨くじら大臣だいじんの報ほう海うみ鱗りん忠ちゆうの示おし  
諭ごの條じょう誠まこと恐おそ汗あせ顔かほの至いたりあり僕わが不遜ふそんの罪つみあ

省人道

十一



曲入道

一

りと雖も直儀祝悦壽席を缺かむ故ゆゑは  
 五倫五常の一端を知るをもて目今任撰を  
 蒙り徵辟を加へらむ博士の職を奉載せし  
 こと面目三骨の徹し有り難き仕合せなり  
 然るに海洲の事勢より諱忌黙止せる際  
 小あらむ見込の素志逐一決定建白仕出  
 つらんと漢語盡しを嘆惜しく尾鱗を張ら

演かきたり

○必竟翻博士魚官負ふ對し何等の  
 議論を吐哉且下の回り小分解し  
 聴ぬかし

蛸入道魚説教初編了

虫入道  
秘

大洋新話 蛸入道魚說教 二篇近刻  
三篇月

桃源齋藏板

東京本石町二丁目  
賣弘所 簀田精三郎

010190522895

